

2018京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



2018 Mutual Faculty Development



2018京都大学のFD

ー京都大学の教育を、語り合うー

2018 Mutual Faculty Development

01	I. ごあいさつ
02	II. 全学教育シンポジウム
05	III. 「3つのポリシー」勉強会
07	IV. 各部局のFD
08	薬学部におけるアクティブラーニング科目「薬学研究SGD演習」
09	V. 新任教員教育セミナー
	VI. プレFDの取り組み
11	1. 大学院生のための教育実践講座
12	2. 文学研究科プレFDプロジェクト
14	3. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義
15	4. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」
	VII. ICTの教育的利用
16	1. オープンコースウェア (OCW)
17	2. KyotoUx:大規模オープンオンライン講義 (MOOC)
21	3. KoALA:学内向けオンライン講義 (SPOC)
25	4. ICT活用教育のためのポータルサイト (CONNECT)
28	5. ワークショップ「ICT活用について考える」
29	FD研究検討委員会概要

I. ごあいさつ



FD研究検討委員会委員長
飯吉 透

本FD研究検討委員会は、2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してきました。本報告書は、本学のFD活動の概要を学内の皆さまに具体的にご紹介するために、毎年作成されているものです。

近年、大学教育と学生の学びのより一層の実質化が求められる中、GPA、キャップ制、コースツリー、新たな入学選抜方式(本学では特色入試等)、単位互換、ジョイント/ダブルディグリー等の導入、3ポリシー(アドミッション、カリキュラム、ディプロマの各ポリシー)の改訂等の教育制度改革が各大学で精力的に進められており、本学もその例外ではありません。

これらの謂わば「定番」の教育制度改革に加え、各大学は、教育研究機関としてのそれぞれのミッションや特徴に固有な教育的課題を克服し発展し続ける必要があります。例えば、次章でも報告されているように、2018年度の「全学教育シンポジウム」は、「京都大学の大学院教育の今とこれから」というテーマで開催され、本学の大学院の現状や課題に対する理解を深めつつ、様々な観点から本学の大学院教育の将来について考える貴重な機会となりました。昨今、我が国の高等教育において、博士課程進学者の減少をはじめとする大学院離れの傾向や、大学から大学院への接続(大大接続)や大学院から社会への接続、さらには、リカレント教育も含んだ社会から大学院への往還的接続の改善が喫緊の課題となっています。本学で大学院教育を受けた者が、優秀な研究者となるだけでなく、専門性の高いプロフェッショナルとして国内外の様々な場で活躍することが、ワールドクラスの総合研究大学である本学に求められている重要なミッションであるの言うまでもありません。

同シンポジウムの午後のパネルでは、大学院教育レベルで専門的知識・技能を学ぶことについて、研究の世界と同様の「タコ壺化」の功罪が、トピックの一つとして議論されました。その際、山極総長が、『「タコ壺化」という言い方は、好ましくない。一つの峠を制覇したら、次の進むべきピークが見えてくるのが本来の学問のあり方であるから、『山脈化』と言うべきだ』と言われたのが、大変印象的でした。

大学設置基準の改正によってFDが義務化されてから、また本委員会が設置されてから、既に10年以上が過ぎました。本報告書の中でも取り上げられているように、本学においても、本委員会や全学・各

部局の努力によってFDに関する様々な取り組みが継続的に行われており、FDは制度的に一定の普及と定着が図られてきました。その一方で、「FDの形骸化が進んでいる」という声が学内外で聞かれることも珍しくなく、FDもまた「タコ壺化」が進んでいるのではないか、という懸念は容易には拭えません。

学生の多様化と学修の個別化への対応を進める必要性が増す中、さらなる教育の実質化を図るためには、FDは引き続き重要な役割を果たすことが期待されます。しかしそれは、これまでのFDを、そのまま惰性的に継続するということではありません。高大接続、リカレント教育、ICTの教育的活用、さらには本学でも各部局の取組や協力のもとに着々と進められている教学IRやデータに基づいた大学教育力の強化等、多種多様な教育制度改革や教育改善に取り組むことが、学科・学部・大学院・全学など様々なレベルにおいて求められています。そのような中で、本学におけるFDも、これまでの一次的なFDを延長していくだけでは不十分であり、教職協働さらには学生をも巻き込んだ教育改革・教育改善プロジェクトを通じた、多面的・多元的な展開が必要な局面、まさに「FDのタコ壺化」から「FDの山脈化」へのパラダイム転換期を迎えていると言えます。

冒頭で述べましたように、大学教育制度改革は「待ったなし」で進行中ですが、教育制度を変えるだけで、大学教育が自動的に改善・進化する訳ではありません。そればかりか、教職員や学生の十分な理解が無いまま制度改革だけが一人歩きして強行的に進めば、本学の長い歴史の中で醸成されてきた教育の良き文化や伝統、優れた特性が失われることにもなりかねません。今、本学の教学にどのような課題や可能性があるのかを、全学的に、また各部局で議論し理解しながら進むことによって、教育制度改革が「仏作って魂入れず」という事態に陥ることを未然に防ぐことは、本学において喫緊の課題です。

このような時局や状況を鑑みて、この度本学では、FD研究検討委員会が発展的に解消され、2019年度からは、教育制度委員会の下にFD企画専門委員会が設置されることとなりました。この新たな体制によって本学のFDが益々の発展・進化することを祈念させていただくと共に、各部局の教職員の皆さまには、FDを通じた本学のさらなる教育改革・改善に向けて、より一層のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

II. 全学教育シンポジウム

「京都大学の大学院教育の今とこれから」



概 要

9月7日、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員207名の参加を得て、第22回全学教育シンポジウム「京都大学の大学院教育の今とこれから」を開催しました。

京都大学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。昨今、我が国の高等教育において、博士課程進学者の減少をはじめとする大学院離れの傾向、大学から大学院への接続（大大接続）や大学院から社会への接続（あるいは社会から大学院への接続）の改善が喫緊の課題となっています。そうした状況の中で、22回目に当たる今回のシンポジウムでは、「京都大学の大学院教育の今とこれから」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方

向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続いて、本学の自然科学分野および人文・社会科学分野の大学院から、5名の研究科長・部長・専攻長にご登壇いただき、各研究科等における大学院教育や大大接続に向けた取り組みについて、ご報告いただきました。

午後の部では、大学院教育の現状と課題について俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、大学院教育における新たな潮流として、プレFDや博士課程のインターンシッププログラムなどについての4つの報告を共有した後、京都大学の大学院教育の未来について、執行部および企業等から6名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



参加者の声

参加された教職員の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数72件、回収率31.2%)。興味深かったプログラムでは、基調講演2の「大学院教育をめぐる現状と課題」(40名)がもっとも多く挙げられ、テーマ1「本学の大学院教育改革:研究科等の取組」(39名)、基調講演1「京都大学の大学院・高大接続の現状と課題」(34名)と続きました(図1)。また、興味深かった点に関する自由記述では、「組織改革、学部1年生の授業内研究室訪問の取り組みなど、やはり手厚く学生に対応せねばならんのだと思った」「挑戦的な未来に向けた教育改善の取り組みを各部署がすすめていることは勉強になった」「大学院および大学院教育の危機・存在そのもののあり方を問い、共有することができた」といった感想もあり、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(40.3%)、「カリキュラムの改革」(18.1%)、「教育方法(アクティブラーニング、PBLなど)」(18.1%)、「英語による授業」(15.3%)、「入試改革(新テスト、特色入試など)」(15.3%)などが多く挙げられており、京都大学と同様の研究大学における教育改革への関心が際だっていました。自由記述の中では、報告内容に

についてのクリティカルなコメントや、問題の指摘ではなくビジョンを示してほしいという要望も寄せられました。これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

*アンケートの回答については複数回答可であったため、合計は必ずしも100%にはなりません。

詳細は『第22回全学教育シンポジウム報告書』

(<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>)
をご覧ください。

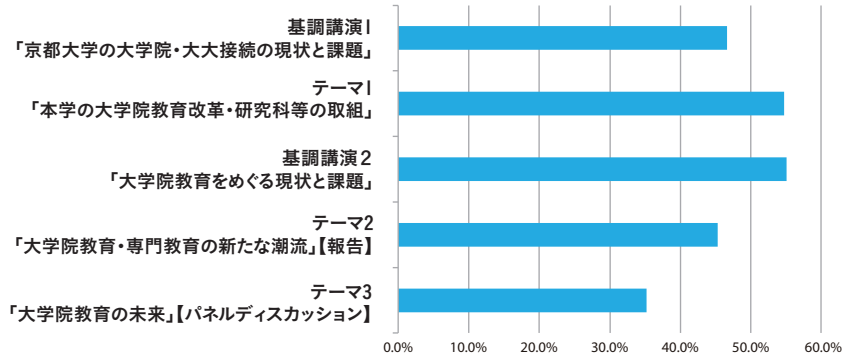


図1 興味深かったプログラム

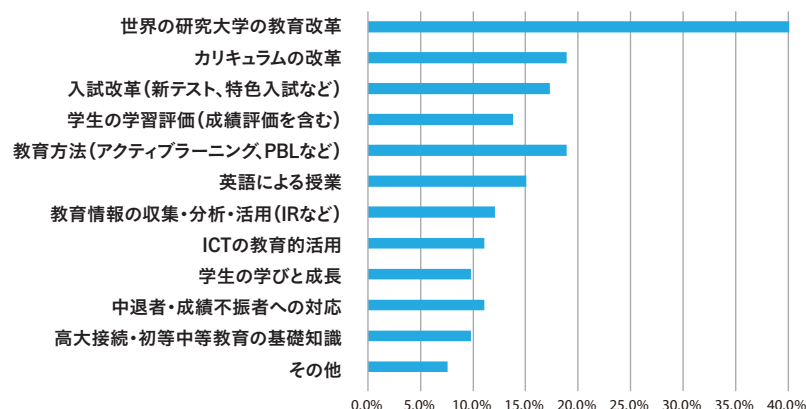


図2 小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマ

II. 全学教育シンポジウム

プログラム [司会進行：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授]

午前の部

10:00～ **開会挨拶・基調講演 I：「京都大学の大学院・大大接続の現状と課題」**
北野 正雄 教育担当理事・副学長

10:35～ **テーマI：報告・パネルディスカッション**
「本学の大学院教育改革：研究科等の取組」

《モデレーター》松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
《パネリスト》足立 壮一 医学研究科人間健康科学系専攻長・教授
稲垣 恭子 教育学研究科長・教授
大嶋 正裕 副理事・工学研究科長・教授
高倉 喜信 薬学研究科前研究科長・教授
原 良憲 経営管理研究部長・教授

12:05～ 昼食・休憩



午後の部

13:00～ **基調講演 2：「大学院教育をめぐる現状と課題」**
山極 壽一 総長

13:35～ **テーマ2：報告**
「大学院教育・専門家教育の新たな潮流」

《モデレーター》田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授
《パネリスト》出口 康夫 戦略調整担当理事補・文学研究科教授
錦織 宏 医学研究科附属医学教育・国際化推進センター准教授
杉野目道紀 戦略調整・教育担当理事補・工学研究科教授
飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授

15:10～ 休憩

15:25～ **テーマ3：パネルディスカッション**
「大学院教育の未来」

《モデレーター》飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授
《パネリスト》山極 壽一 総長
北野 正雄 教育担当理事・副学長
川添 信介 学生担当理事・副学長
有賀 哲也 教育改革担当副学長・理学研究科教授
喜多 一 情報環境機構長・国際高等教育院教授
古藤 悟 三菱電機先端技術総合研究所技術顧問・
(一社)産学協働イノベーション人材育成協議会理事

16:55～ 閉会挨拶

17:00～ 終了

17:15～ 情報交換会 カフェ「Arte」



Ⅲ. 「3つのポリシー」勉強会

本学では現在、教育制度委員会の下で、「3つのポリシー」(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)の見直しが進められています。この改革の支援として、見直しのためのツールの作成や、勉強会・コンサルテーションが行われています。

Ⅰ. 勉強会の開催

2018年12月26日、2019年1月15日の2回にわたって、「3つのポリシー」勉強会を開催しました(主催：高等教育研究開発推進センター、協力：教育推進・学生支援部教務企画課)。3ポリシーについては、2016年に策定・公表が義務化されたため、2016年度にも勉強会等を実施しましたが、そのときは学部が主で、大学院についてはアドミッション・ポリシーのみの見直しにとどまっていた。今回の見直しは、2019年度に受審する第3期認証評価を念頭においたものであり、学部・大学院(研究科、専門職大学院、リーディングプログラム)のすべてを対象としています。

すでに教育制度委員会において、「3つのポリシー等に関するチェックリスト」「各ポリシー見直しの視点」「チェックリスト

の記載例」といった見直しのためのツールが作成され、各部局に提供されていました。そこで、支援においては、3ポリシーの考え方、認証評価との関係、見直しのポイントなどを、具体例にもとづいて説明するとともに、各部局の見直しの支援を個別に行っています。

第1回勉強会では、第1部で、策定上の留意点についてセンターから説明した後、意見交換し、第2部で、希望部局に対して相談会を行いました。第2回勉強会は、これまでのQ&Aを簡単に整理して示し、大半の時間を相談会にあてました。勉強会の参加者の多くは各部局の3ポリシー策定担当で、参加者数は第1回が47名(20部局)、第2回が20名(11部局)でした。



Ⅲ. 「3つのポリシー」勉強会

主な相談内容としては以下のような点がありました。

- 学部・大学院の中には様々な専攻やプログラム等があるが、それをどうまとめて記載すればよいか。
- ディプロマ・ポリシーにおいて、社会的ニーズや学修目標をどう表現すればよいか。
- 3ポリシーは頻繁に変更できるものではないのである程度の抽象性をもたせた書き方になるが、一方で「明確かつ具体的」であることを求められる。その折り合いをどうつければよいか。

なお、いくつかの部局では、AP→CP→DPという順序で読み進めることを前提とした書き方がなされていますが、もともと3ポリシー設定の背景には学位の国際的通用性を高めるという要請があることから、DP→CP→APという順序でロジックを組み立てることが求められています。勉強会ではそのことを強調しました。

以上の勉強会の資料は、高等教育研究開発推進センターのウェブサイトに掲載されています。

(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/event-2/>)



2. 個別コンサルテーション

勉強会以外に、要望のあった部局（農学部・農学研究科、教育学部・教育学研究科、薬学研究科、工学部・工学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、医学研究科社会健康医学系専攻、法学部・法学研究科：1月20日現在）に対しては、個別にコンサルテーションを行いました。

3ポリシーの策定は、単なる作文ではなく、それを実現する学位授与、教育課程、入試方法が求められます。その意味では、教育改革の要ともいえるものです。

各部局から修正のうえ提出された3ポリシーは、教育制度委員会で検討され、2019年5月には公開されることになっています。



IV. 各部署のFD

全学のファカルティ・ディベロップメント（FD）活動としては、教育担当理事が主宰し、全部局から参加を求めている「全学教育シンポジウム」を毎年開催していることに加え、高等教育研究開発推進センターおよびFD研究検討委員会が中心となって、新任教員を対象とした「新任教員教育セミナー」や大学院生を対象としたプレFD活動「大学院生のための教育実践講座」等を開催しています。

各部署においても様々な形でFD活動が展開されています。ここでは、その一部を紹介させていただきます。

1. 授業評価アンケートを活用したFD活動

本学では、アンケートシステム(KULIQS(全学版)または部局独自のシステム)などの利用により、全ての学部・研究科および国際高等教育院において授業評価アンケートを実施しています。そして、授業担当教員へのフィードバック、シラバスの利用状況や全体集計結果の検証、FD活動やカリキュラムへの反映および関係者やホームページ上での公開等を行い、教育改善に活用しています。

例えば、薬学部・薬学研究科、経営管理教育部、医学研究科社会健康医学系専攻では、授業評価アンケートの結果を活用して、「ベストティーチャー」を選出・表彰したり、当該教員の授業を他の教員が聴講したりしています。また、アジア・アフリカ地域研究研究科では、「授業評価アンケート」の結果を研究科会議で公開し、学生からの意見に対する次年度の授業における対応内容を報告するといった取組を行っています。

2. 教員調査の結果を活用したFD活動

総合人間学部、人間・環境学研究科では、教員に対して指導法の工夫・改善、成績に関する学生対応等に関するアンケートを実施し、調査結果を教授会に報告するとともに、「人環レビュー資料編」に掲載し、構成員に周知・公表しています。また、調査結果は、教務委員会において、教育指導体制の改善に向けた資料として検討しています。

3. 集中的な研修機会の設定によるFD活動

工学部・工学研究科では、「工学教育シンポジウム」(例年150名以上が参加)を毎年開催し、授業アンケートの分析結果の報告も含め様々なテーマについて討議と意見交換を行っています。医学部・医学研究科では、「医学教育ワークショップ(KUROME)」(原則、教授会構成員は全員参加)を毎年開催し、医学教育全般に関するテーマについて討議と意見交換を行っています。教育学部・教育学研究科では、「教育学研究科セミナー」を定期的に開催し、教育全般に関するテーマを設定し、構成員間で議論を行っています。

IV. 各部署のFD

薬学部におけるアクティブラーニング科目「薬学研究SGD演習」

薬学部では2018年度入学者より、3年次までの学部教育で一定の知識や経験を吸収してから4年次に進路設計ができる「レイト・スペシャリゼーション」を掲げた学部教育制度改革を実施しました。それにより、高い研究意欲と倫理観を持って博士課程進学を希望する学生が増加することを目指しています。レイト・スペシャリゼーションの実現には、本学部が育成したいと考える人材像を学生に早期から伝えること、高い薬学研究マインドを学生に醸成させること、学生が将来ビジョンを描きやすい環境を整備することが重要です。カリキュラムの見直しでは、アクティブラーニングの充実が好適であると考えました。本稿では、2018年度に新たに立ち上げたアクティブラーニング科目「薬学研究SGD(Small Group Discussion)演習」について紹介します。

本科目の準備・企画を、5名の薬学部教員(山下富義教授、柿澤昌准教授、津田真弘講師、矢野義明講師、高須)がWGを編成し、高等教育研究開発推進センター教員(松下佳代教授、斎藤有吾特定助教。2018年度からは、斎藤助教に代わって長沼祥太郎研究員)と連携をとり、1年前から開始しました。本演習は2コマ連続(3時間)で半期にわたって行う選択科目であり、2018年度は1年生(全86名中)83名が履修しました。内容に応じて83名を2〜4クラスに分け、さらに各クラスの学生を2〜5名程度の小グループに分けてグループワークを行うこととしました。教員は薬学部全教員の約1/3となる15名が2〜5回担当し、各クラスに1〜2名のTAを配置しました。各教員はWGが作成した資料をもとに各演習を行い、授業態度および提出物について科目ルーブリックに基づき評価しました。成績には反映させませんでしたが、学生同士でスキルや態度を反省するためにグループ員のピア評価を行う工夫もしました。演習テーマは下記のとおりです。

- 第1週 オリエンテーション、アイスブレイク
- 第2・3週 コミュニケーションスキル
- 第4・5週 ロジカルシンキング、ディベート
- 第6週 医療・生命倫理
- 第7・8週 薬学研究基礎①
(科学ディベート、情報収集)
- 第9・10週 薬学研究基礎②
(研究者インタビュー、プレゼンテーション)
- 第11〜14週 第7〜10週の繰り返し

薬学研究科教授 高須 清誠

演習に先立ち教員およびTAが集まり、演習の意図・進め方・評価の仕方を打合せたため、アクティブラーニングの経験のない教員でもスムーズに授業ができたようです。また、以後の演習に役立てるように担当教員以外も自由に見学可とし、演習後は関係教員でふりかえりのディスカッションを行ったことは、教員の教育スキル向上に役立ったと思います。高等教育研究開発推進センターの教員に毎回の演習を見学してもらい、演習内容や方法の修正に関する助言を随時与えてもらったことも、薬学部の教員にとって大きな勉強になりました。

学生の授業アンケートでは、本演習の評価は高く、「同級生との横の繋がりができた」、「主体的な学びのスキル修得ができた」、「多様なコミュニケーションスキルを学んだ」、「研究や学術探究に対する意識・意欲が高まった」などの意見がありました。また、将来設計や博士進学への意識にもよい影響がうかがえたことは、本演習の目的に合致した成果だと思っています。一方で、「授業外学習の負担が大きい」、「教員間の連携不足」などの意見があり、次年度以降の課題として工夫が必要なところです。なお、高等教育研究開発推進センターの教員による各回の授業レポートがホームページに掲載されていますので、ご覧いただければ幸いです(URL: <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/sdg/>)。

総合的には、この新たな取組により、学生の学びに対する態度や意識向上に効果があったと考えています。薬学部では2年次以降も新たなアクティブラーニング科目が予定されており、学生には主体的な学びをする機会が継続的に提供されます。年次進行で学生の学習動向について調査することで、アクティブラーニング科目の効果検証も行う予定です。将来的には、これを大学院の学修にもつなげていきたいと考えています。



グループワーク
(コミュニケーションスキル)の風景



ディベートの風景

V. 新任教員教育セミナー

9月19日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2018」を開催しました。本セミナーは、今年度が第9回目となり、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています(表1)。

今回の参加者は96名(教授7名、准教授30名、講師9名、助教50名)でした。セッション1では、北野正雄教育担当理事・副学長より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と

題したオープニングレクチャーがありました。セッション2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、沼田英治理学研究科教授より授業実践の紹介がありました。セッション4では、高等教育研究開発推進センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました(表2)。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

表1 2018年度京都大学新任教員教育セミナープログラム

13:00～	開会式 (司会: 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史) 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長(教育・情報・評価担当) 北野 正雄
13:30～	セッション2 ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」 文学研究科准教授 伊勢田 哲治
13:55～	セッション3 私の授業 薬学研究科教授 沼田 英治
14:20～	セッション4 京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史/田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション5 グループ別セッション(参加型セッション)(詳細は表2参照)
16:30～	休憩
16:50～	セッション6 インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 閉会挨拶 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代

V. 新任教員教育セミナー

表2 セッション5 参加型セッションの各テーマと内容

【テーマ】	京都大学の国際化をどのように進めるか
【担当講師】	国際戦略本部特定講師 フェルナンド・パラシオ
【主な内容】	本学では、一層の学術の発展と持続可能な地球社会の構築に貢献するために、国際化のための包括的な計画を提示する「国際化推進に関する基本コンセプト」を策定しました。本セミナーでは、このコンセプトを出発点に、京都大学の国際化を推進するためのベストプラクティスについて、参加者のみなさんとともに検討したいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター SADEHVANDI研究員 河野研究員
【テーマ】	研究室運営を考える
【担当講師】	学際融合教育研究推進センター准教授 宮野 公樹
【主な内容】	教員にとつての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI (Principal Investigator) 各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター 岡本特定助教
【テーマ】	困難を抱えた学生に向き合うには
【担当講師】	学生総合支援センターカウンセリングルーム准教授 中川 純子
【主な内容】	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいのでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター 鈴木特定研究員
【テーマ】	アクティブラーニング型授業をやってみよう
【担当講師】	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
【主な内容】	今年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業（講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業）に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験してもらいながら紹介します。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方まで参加できます。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター 川内研究員
【テーマ】	ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈／酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司
【主な内容】	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセミナーにしたいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター 安宅特定研究員



参加者の事後アンケート(86名/回答率89.6%)より、総合評価は「4.4」(「非常に有意義」から「まったく有意義でない」の5段階)と高い評価が得られました。また、上位項目としては、私の授業(4.79)、インテグレーションセッション(4.53)、グループ別セッション(4.51)でした。

参加して良かった点に関する自由記述では、「普段は個人の研究成果の向上などに意識が向きがちですが、大学の一員としての意識が高まり、良いと思いました」、「普段の業務では全く聞く事が出来ない様な話や意見をお聞きする事が出来ました。

自分だけではなく研究室の他の人にも知っていただきたい内容でした」、「自分の(研究室・学部)以外の授業の仕方、研究室運営のノウハウを学べたのが大変有意義でした。もし許されるのであれば、振り返りとして数年後にもう一度このようなセミナーに参加したいです」など、様々な感想を寄せていただきました。

引き続き、先生方の声を聴きながらよりよいプログラムにしていきたいと思います。

VI. プレFDの取り組み

I. 大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会・高等教育研究開発推進センターが共催し、将来、大学教育に携わることを希望する本学の大学院生(PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で14回目となります。2018年度は、8月21日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。様々な専門分野から32名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか?」に対する考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加

した受講生には総長名の修了証が授与されました。

終了直後にアンケートを実施し(有効回答数27件、回収率84.4%)、プログラム全体に対する満足度を5件法(1:まったく満足していない～5:非常に満足している)で受講生に評価してもらったところ、満足度の平均が4.7点と、非常に高い満足度でした。また、今回初めて、各分科会のまとめをポスター発表の形式で行ったのですが、その評価も4.7と好評でした。このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「大学教育を目指す大学院生は、研究能力については常に考えるにもかかわらず、大学教育について考える機会がないのは問題だと考えていたので、とてもよいと考えます」など、このような講座の必要性を認め、評価する感想が数多く見られました。

大学院生のための教育実践講座：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>
<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2018.php>

2018年度のプログラム

10:00～	開会式 挨拶:北野 正雄 理事・副学長
10:20～	セッション1 ミニ講義1「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」: 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
10:45～	セッション2 グループ討論1:「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」 「授業デザイン」の4つの部会に分かれて議論
11:45～	セッション3 ランチと自由討論
13:00～	セッション4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」: 蓮 行 劇団衛星主宰
14:20～	セッション5 ミニ講義2「私の授業実践」:斎藤 有吾 藍野大学助教
15:05～	セッション6 グループ討論2:「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」 「授業デザイン」の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
16:05～	グループ討論整理
16:40～	セッション7 全体討論:ポスター形式で4部会から7グループのポスターを掲示し、 活発な議論を展開
17:40～	ラップアップ
17:55～	閉会式 挨拶・修了証授与:飯吉 透 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交換会(～18:30)



VI. プレFDの取り組み

2. 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

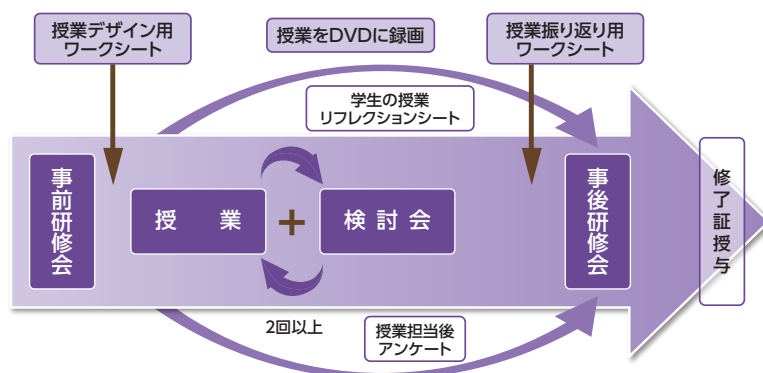
本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2回以上の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、本学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約150名が修了証を得ています。

2018年度は、文学研究科よりコーディネーター6名、教務補佐員5名、講師24名が参加し、高等教育研究開発推進センターより5名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、下記のHPをご覧ください。

●文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

2018年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

伊藤 和行：文学研究科教授／統括コーディネーター

周藤 多紀：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

水谷 雅彦：文学研究科教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

定延 利之：文学研究科教授／行動・環境文化学系コーディネーター

塩出 浩之：文学研究科准教授／基礎現代文化学系コーディネーター

永原 陽子：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター

橘 英希：哲学基礎文化学系教務補佐員

長岡 徹郎：行動・環境文化学系教務補佐員（前期）

君嶋 泰明：行動・環境文化学系教務補佐員（後期）

朴 珍姫：基礎現代文化学系教務補佐員（前期）

朴 美暲：基礎現代文化学系教務補佐員（後期）

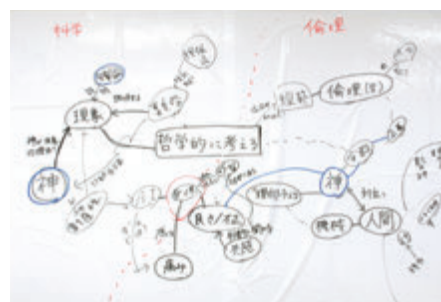
飯吉 透：FD研究検討委員会委員長・
高等教育研究開発推進センター長・教授

松下 佳代：高等教育研究開発推進センター教授

田口 真奈：高等教育研究開発推進センター准教授

鈴木 健雄：高等教育研究開発推進センター特定研究員

香西 佳美：高等教育研究開発推進センターオフィスアシスタント／
教育学研究科（高等教育学コース）博士後期課程



2018年度のプレFDを振り返って

統括コーディネーターから

今年度、2009年度に開始したプレFDプロジェクトも、10年目という節目の年を迎えましたが、各系のコーディネーターの先生方や教務補佐員の皆さん、高等教育研究開発推進センターの方々のおかげで順調に終えることができました。当時、手探りで始まったこのプロジェクトも、現在では大学教育のための教育実習のシステムとして定着したように思います。このようなニーズは10年前よりも高まっており、これからもプレFDが果たす役割が減少することはないように感じています。

また2015年度に始まったコンソーシアム京都との連携によるリレー講義「人文学入門」は昨年度で最初の3年を終えましたが、今年度から第二期に入り、「京都で学ぶ人文学」として再出発しました。今年度に引き続き来年度も継続することになっています。プレFDの発展形として、この課程を修了した講師が、京大の外に出て授業を行うことを通じて、いっそう教育のスキルを向上させることが期待されます。



文学研究科教授
伊藤 和行

各系のコーディネーターから

●哲学基礎文化学系

以前に講師として参加したことがあるプレFD・思想文化学系ゼミナールに、このたび、コーディネーターとして参加しました。私が講師として参加していた頃に比べると、プレFD・系ゼミナールのシステムが確立され、もはやコーディネーターを必要としないほどに成熟してきたと感じました。博士課程を終えたばかりの各講師が、自分の研究分野についてわかりやすく、かつ魅力的に語ろうとしていて、私自身も興味をそそられ、勉強になりました。また、授業後に行われる検討会では、講師同士やTAが適切な指摘・批評をするのに感心しました。数学の哲学から聖書解釈まで、一見するとバラバラな授業内容でしたが、参加した学生は、ゼミナール最終回に行った、各授業のキーワードを相互に関係づける、コンセプトマップ作成を楽しんでいました。



文学研究科准教授
周藤 多紀

●行動・環境文化学系

2018年度のプレFDのコーディネーターを担当させていただきました。前任の板倉先生から「教務補佐が肝心!」と伺っていたとおり、優秀なお2人の教務補佐・長岡さんと君嶋さんに大いに助けていただきました。初回の授業における問題点が、検討会を経た2回目の授業で驚くほど改善されるということが少なからずあり、ピアレビューの重要性を改めて感じました。残念に思うのは、講師一人一人の授業は興味深くても、講義全体としてややまとまりを欠き、断片的な印象がぬぐえなかったことです。これは「行動文化学」という領域の広大さの現れとも言えるでしょうが、教務補佐さんがせっかく多大な時間を使って送ってくださる「授業と検討会の概要」を講師の皆さんがもっと利用して、「先日の〇〇先生の授業では～を勉強したと思うけど、それに関連して今日は～」のような導入・位置づけが少しでもあれば、受講者の学習意欲はさらに増したのではないかと思います。



文学研究科教授
定延 利之

●基礎現代文化学系

2018年度に本学に着任し、右も左も分からないままに「プレFD」の担当となりました。ですが、実際に授業やその後の検討会に参加してみると、このプロジェクトが将来の大学教員を養成するため有意義だとよくわかりました。アクティブラーニング型の授業も、あまり形式ばかりにとらわれては本末転倒ですが、学生に考えさせたり対話したりする時間を講義に設けること自体は使えるなと気づき、自分でもさっそく採り入れてしまいました。

授業は比較的少人数で、あまり距離感のない雰囲気の中で行われたため、学生の反応を確かめたり予備知識を把握したりしながら進められた講師はよい授業ができていたようです。もっとも、専門性が高すぎるとされる講義や課題にも、学生が(驚いたことに)けこうついてしまうためもあったか、一部には一方的な授業に終始する回もあったことは否定できませんが、その場合も、アンケートや検討会によるフィードバックを通じてかなりの改善がみられたと思います。「プレFD」は貴重な研鑽の場といえるでしょう。



文学研究科准教授
塩出 浩之

VI. プレFDの取り組み

3. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、文学研究科が提供する単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」が開講されました。本授業は、2015年度～2017年度まで開講された「人文学入門」を継続、発展させたものであり、特色ある科目として「ブラザ推奨科目」に認定されています。受講生は、本学の学生を含め、様々な大学から集まっています。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

2018年度の開講テーマは「『エラそう』なものを疑おう！ 社会の不合理を考える異分野コミュニケーション」でした。コーディネーター1名のもと、倫理学や心理学、宗教学、社会学、言語哲学と

いった様々な専門分野出身の若手講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。一方的な知識伝達だけでなく、受講生間のディスカッションを促す工夫が凝らされた本講義を通じて、受講生は、社会的規範や「当たり前」とされるもの、権威づけられた対象や制度をいかに疑い、疑った先にどんな新しい認識が得られるのかについて理解を深めました。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦した本授業に対して、受講生からは、「普段見逃していた矛盾点(エラそうなもの)に気付きました。グループワークで先生を交えつつ議論し、深く探究できたので良い経験になりました」「先生も一緒になって悩んでくれて嬉しく、先生や生徒との距離が近い授業で充実していました。いろんな先生が私たちに一生懸命に何かを伝えようとしてくれているのが伝わってきました」「あまり勉強は好きではないのですが、最終的に、意欲的になれるキッカケをくれました」などの感想がありました。ここからは、プレFD修了生たちの授業が、内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

●文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

2018年度のプログラム

コースコーディネーター：文学研究科教授 松田 素二

- 1 イントロダクション：文学研究科教授 松田 素二
- 2 メディアと規範：文学研究科研修員 トジラカーン・マシマ
- 3 4 研究参加の倫理：文学研究科非常勤講師 菅原 裕輝
- 5 6 心的時間旅行の比較認知科学：文学研究科非常勤講師 別役 透
- 7 8 日本における宗教：京都産業大学非常勤講師 長岡 徹郎
- 9 10 エスニシティの社会学 —「在日朝鮮人」を事例に：文学研究科非常勤講師 孫・片田 晶
- 11 12 規範性と哲学：文学研究科非常勤講師 白川 晋太郎
- 13 14 レポートの書き方：文学研究科非常勤講師 ギョーム・ラドミラル
- 15 まとめ：全員



2018年度に向けた講師全員での打ち合わせ(2017年11月27日)



アクティブラーニングを取り入れた授業の様子

4. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学士の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・

研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」(p.11参照)は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2018年度は2月6日・7日・8日の3日間で開催されました。受講生は12名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(医学研究科2名、人間・環境学研究科3名、経営管理大学院4名、公共政策大学院1名、教育学



研究科2名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(12名中11名から回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均4.0)」、「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.9)」、「自分の将来に役立つ内容だった(3.9)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(4.0)」(いずれも4段階評価)など高い評価が得られました。自由記述からは、「全ての内容について配慮がされており、楽しい授業で自ら学びたいと感じる仕組みが大変良かったです」、「今後大学で教えることがあった場合、このプログラムを受ける前よりも多角的な点から考えて授業を行えると思います」、「本講義は全体を通して『実践で使える知識』が非常に多く、将来何かしらの講師を目指す学生にとっては有用性の高い内容であったと感じています」といった様々な声が聞かれました。

VII. ICTの教育的利用

1. オープンコースウェア (OCW)

京都大学OCWから公開している講義コンテンツ

京都大学オープンコースウェア(OCW)で映像が視聴できる講義は822を数えます(2019年1月現在)。本学のOCWは、通常の講義以外にも、国際会議や公開講座、最終講義、オープンキャンパス等の多様な教育コンテンツを国内外の人々に向けて精力的に発信しています。現在公開されている講義コンテンツは、講義が348、公開講座が326、国際会議が75、最終講義が73あります。FDに直接関わる講義映像としては新任

教員教育セミナーの映像が公開されています。また、本委員会のウェブサイトでは、授業をよりよくするために教員にとっても参考になるOCWの「おすすめ授業」が紹介されています。

2018年度は、理学研究科数学系ユニットの「KTGU Special Lecture」や国際高等教育院の「基礎化学実験」など各部署が制作した映像をOCWへご提供いただきました。それらの映像をOCWから公開することにより、教育コンテンツの再利用に役立っています(図1)。

● 京都大学オープンコースウェア : <https://ocw.kyoto-u.ac.jp>

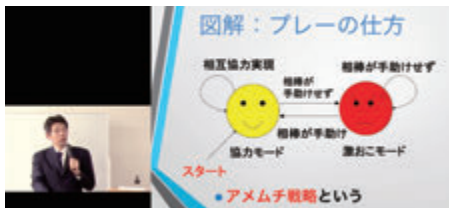
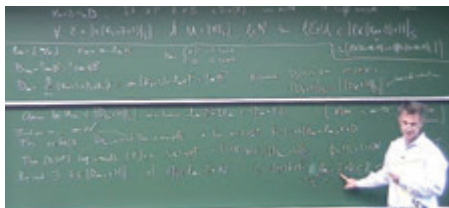
第3回 京都大学 — 稲盛財団合同京都賞シンポジウム 「PD-1抗体によるがん治療」本庶 佑 高等研究院特別教授  https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/158	理学部「細胞内情報発信学」「生物学セミナーB」 森 和俊 理学研究科教授  https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/06-faculty-of-science-jp/13 https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/06-faculty-of-science-jp/14
京都大学丸の内セミナー「繰り返しゲームの世界:協力的行動の分析」 関口 格 経済研究所教授  https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/152/videos/20180406	理学研究科 数学系ユニット 「KTGU Special Lecture」  https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/ktgu_special_lectures

図1 これまでに公開されたOCWの例

京都大学オープンコースウェア(OCW)について

京都大学OCWは、学内で実際に行われている講義のビデオや教材をインターネットで公開するプロジェクトで、2005年より国内外に向けて講義コンテンツを発信してきました。本学の学生や教職員、他大学の学生、関連学協会の研究者、本学への入学を目指す高校生、スキルアップのためにさらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、本学が行っている「教育」を多くの人に知ってもらうことを目的としています。また教育情報の公開を目的として、全部局のシラバスにOCWからアクセスできるようになっています。これまで蓄積されてきた800以上の教育コンテンツをどのように学内の授業等で活用してい

くか、高等教育研究開発推進センターに設置された教育コンテンツ活用推進委員会において議論・検討されています。今後も、世界へ向けて本学のビジュアル性を高め、教育・研究から生まれた知識を広く社会に提供できるように、コンテンツを充実させていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

OCWのコンテンツ制作は、高等教育研究開発推進センターの教職員と学生スタッフで、講義収録、編集、推進を行っています。みなさまもOCWを通じて講義コンテンツを公開してみたいかがでしょうか。

2. KyotoUx: 大規模オープンオンライン講義 (MOOC)

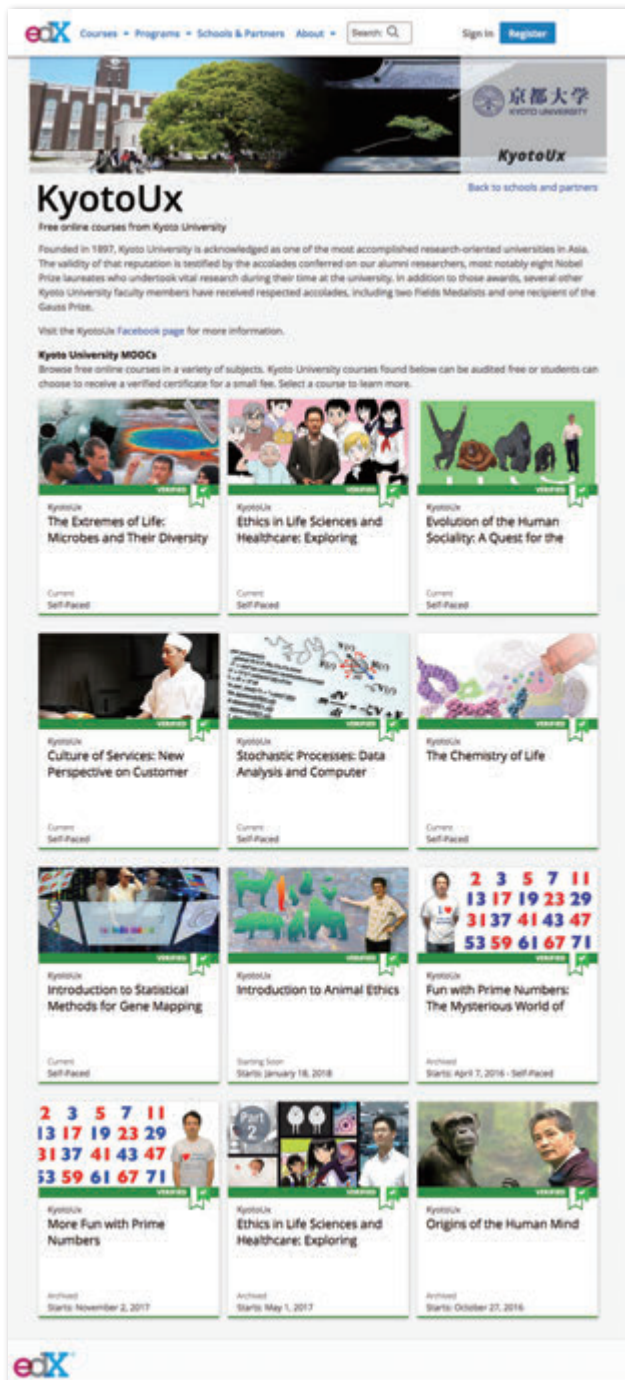


図1 edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)

(1) 京都大学におけるMOOC

京都大学は、MOOC(Massive Open Online Courses: 大規模オープンオンライン講義)プラットフォームのedX(<https://www.edx.org>)を通じ、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWも本学の教育をインターネットを通じて世界に公開するという「教育のオープン化」に関わるプロジェクトですが、MOOCは大学の講義と同様に、開講期間が設けられており、受講者は毎週の講義内容を講義ビデオや課題に取り組みながら学習を進められることが特徴です。担当の教員に質問することもできますし、課された問題や試験に解答し、一定の成績を満たした受講者には修了証が発行されます¹⁾。このように、文化や学歴も多様な世界中の受講者と一緒にオンラインで交流しながら学習を進めるMOOCは、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に利用が広がっています。

edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関、企業等で構成されるMOOCの大学コンソーシアムです。京都大学は世界トップレベル53校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。

MOOCの制作や運用、分析・評価については高等教育研究開発推進センターが担当部局となっており、2018年度は新規1講義を含む11講義が開講されました(表1、図2)。今年度、新規に開講した「Culture of Services: Paradox of Customer Relations」は、山内裕経営管理大学院准教授による「サービスの文化」をテーマとした講義で、同准教授が過去に提供した8週間の講義コンテンツ(講義ビデオ・課題を含む)を再構成し、文化的視点からサービスのデザインを捉えるトピックが加わるなど、新たな講義として提供されました。これらの新規開講の講義を含め、多くの講義が再開講により受講登録可能となっています。ご自身の興味や関心に応じてアクセスしてみたいかがでしょうか。

注1: 受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)の Verified Trackに登録する必要があります。

VII. ICTの教育的利用

表I 2018年度開講講義

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考**
4月5日～ 2019年3月28日	The Chemistry of Life	上杉 志成 教授 (物質-細胞統合システム拠点/化学研究所)	15週 Self-paced	5回目
4月3日～ 2019年2月28日	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授 (医学研究科)	4週 Self-paced	JGP 4回目
4月12日～ 6月7日	Culture of Services: Paradox of Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	新規
5月17日～ 2019年3月14日	Introduction to Animal Ethics	伊勢田 哲治 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
5月17日～ 2019年3月14日	More Fun with Prime Numbers	伊藤 哲史 准教授 (理学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
10月1日～ 2019年8月29日	Culture of Services: Paradox of Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	2回目
10月1日～ 2019年8月1日	Stochastic Processes: Data Analysis and Computer Simulation	山本 量一 教授 (工学研究科)	6週 Self-paced	JGP 3回目
10月18日～ 2019年8月1日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 4回目
12月6日～ 2019年9月26日	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior	山極 壽一 総長	6週 Self-paced	3回目
12月6日～ 2019年9月26日	Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授 (工学研究科)	4週 Self-paced	JGP 4回目
2019年2月28日～ 2020年2月20日	Origins of the Human Mind	松沢 哲郎 特別教授 (高等研究院・霊長類研究所)	5週 Self-paced	2回目

* 配信期間欄の“Self-paced”は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

** 備考欄の“JGP”はスーパーグローバル大学創成事業「京都大学ジャパングートウェイ (JGP)」からの提供講義です。これらの講義は本事業の助成を受け開講しています。また、回数は再開講を表しています。



図2 2018年度新規講義「Culture of Services: Paradox of Customer Relations(山内裕准教授)」より

(2)FDの機会としてのMOOC

世界中の人々に英語で提供するMOOCの制作や提供は、担当する教員にとっては講義ビデオの収録や自動採点が可能なテストの作成、掲示板での質問対応など、授業開発や授業改善という点でFDの機会ともなっています(図3・4)。講義終了後に高等教育研究開発推進センターのスタッフが受講履歴やアンケート結果などのフィードバックの機会を設けており、次回開講に向けた講義コンテンツの改善を行うことも少なくありません。

MOOCを担当した本学の教員や、講義制作や受講者対応に関わった大学院生の体験談、MOOCの教材を学内で反転授業の教材やディスカッションの題材として活用している事例について下記のURLにあるコースカタログ「Learn on the Planet」に掲載されていますのでぜひご一読ください。

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/resources/kyotoux.php>



図3 MOOCのビデオ制作支援・スタジオでの撮影の様子

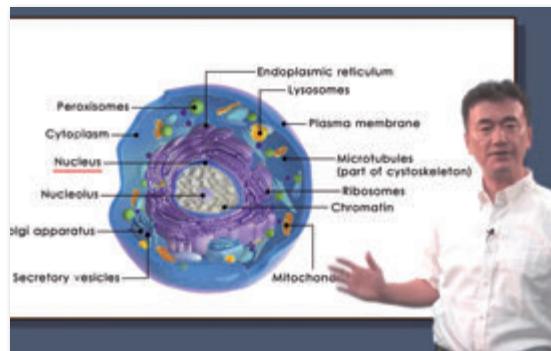
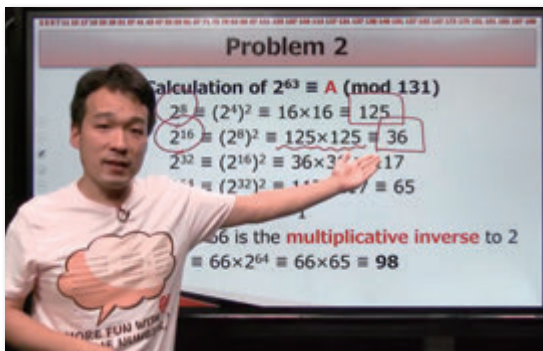


図4 講義スタイルに合わせた講義ビデオの作成

Ⅶ. ICTの教育的利用

(3) MOOCのアセスメント

高等教育研究開発推進センターの教育アセスメント室では、MOOCに関わる様々なデータを収集し、講義の改善に役立つ調査研究を行っています。

① コースレポートの作成とフィードバック

MOOCのプラットフォームであるedXからは、受講者情報(年齢、性別、地理的情報など)に加えて、課題への取り組み、講義ビデオの視聴といった学習者の学習履歴が提供されます。また、独自のウェブアンケート(entrance survey & ending survey)を作成し、受講者からの回答を収集しています。この調査では、

受講の動機、事前の知識、満足度や講義全体へのコメントなどについて聞いています。

収集したデータをコースレポートの形に集約し、制作チームとアセスメントチームが合同でフィードバックを行います。担当教員と直接面談し、今後の改善に向けた議論を行います。2018年度は、9名の先生(18のコース)に対してフィードバックを行い、MOOCのコース改善に資する議論を行ってきました。こうした議論を経て、専門用語をまとめた資料集の作成や、演習問題の改善などが今後取り組むべき課題として浮上しました。

コースレポートの構成

コースの基本情報	開講期間など
コースレポートの要約	コースレポートの内容を1ページに要約したもの
人口統計学的指標	性別、年齢、地理的情報など
行動ログに基づく集計	コンテンツのアクセス率、問題への取り組み、成績の分布のグラフなど
質問紙調査のデータ集計	Entrance SurveyやEnding Surveyなどコース中で実施した量的データの集計
受講者からのコメント	コースの改善の要望などを一覧にまとめたもの

② Annual Reportの作成と公表

MOOCの成果を伝える資料として、Annual Reportも作成しています。Annual Reportでは、京都大学で1年間に開講したコース全体に対して、1)何カ国から、2)何名が登録し、3)修了証が何部発行されたかといった情報が一目でわかります。また、社会貢献という観点から、特に発展途上国の教育機会の乏しい人々に対してどれだけリーチできたかも情報として提示しています。

これらの統計から、MOOCがこれまでの高等教育の壁を壊し、教育の機会均等、生涯学習という観点において極めて魅力的な学習方法であることがわかりました。現在、上記の情報を一望できるマネジメントシステムである“Hawk Eye System”を開発中であり、高等教育研究開発推進センターのMOOCの現状をリアルタイムで把握することが将来的に期待されています。



図5 MOOCのAnnual Reportの一部(2016年度の国別登録者数トップ10)

3. KoALA:学内向けオンライン講義 (SPOC)

(1) SPOCについて

MOOCが全世界に向けて配信するオンライン講義であるのに対し、各大学の中で学生向けに提供するオンライン講義・教材・学習環境を総称してSPOC(Small Private Online Courses)と呼びます。MOOCと同様の教育学習環境を利用したSPOCの取り組みに世界的に注目が集まっています。

講義ビデオや課題作成を含めた完全なオンライン講義を制作する必要があるMOOCと異なり、SPOCは、各大学や教員固有の目的やニーズに応じた柔軟な利用形態が可能となります。例えば、通常の授業のように特定の講義の受講者のみに教材へのアクセスを制限する以外に、学内外を問わず広く受講者を募ることも可能です。講義の視聴や課題への取り組み状況を、学習データ分析ツールでモニターし、それに応じて翌週の授業内容や進度を微調整することもできます。また、反転授業や予

復習のための教材を学生に提供することで、教室内での時間を有効活用できるようになります。また、オンライン講義・教材作りに関わる教員や大学院生にとっては、授業改善や教育研修の機会と捉えることもできます。SPOC導入により、学生の主体的・能動的学習を加速・後押しするとともに、今後の本学におけるMOOCの質的向上・量的増大にも繋がることが期待されます。

(2) 京都大学におけるSPOC (KoALA)

edXのプラットフォームがオープンソース化された「Open edX」を利用し、主に本学の学生や教職員が利用することを目的として、「KoALA(コアラ) : Kyoto University Online for Augmented Learning Activities」を高等教育研究開発推進センターが2018年4月より運用しています(図1)。学内の講義での活用のほか、個別のニーズに応じて一部の講義では一般公開を行っています。



図1 KoALAの画面例(左:トップページ、右:講義紹介ビデオより)

VII. ICTの教育的利用

2018年度は、2017年度に試行的に行った2講義の再開講を含め、表1に示す講義がKoALAより提供されました。

学内の正課の授業に関しては、下田宏エネルギー科学研究科教授による「電気電子回路入門」をはじめ4件のオンライン講義が対面授業の代替などとして活用されました。電気電子回路入門を受講した本学の学生からは、

- 理解できなかった箇所を講義ビデオで繰り返し視聴できる
- 講義ビデオの視聴速度を上げることにより効率よく学習できる
- じっくり考えたいときに講義ビデオを一時停止できる

●試験前の復習のために活用できる

などの高評価を得ています。引き続き、対象とする学年や分野が異なる授業でSPOCを提供し、それぞれの条件における学習効果の向上や教員の授業負担の軽減等を検証していく予定です。

今年度の提供講義の中で、北野正雄教育担当理事・副学長による「音波入門－音波の不思議を探る－」は、音波に関する実験映像を通じ、音には高校の物理で学ぶ内容とは異なる側面があることを体験的に学習することを目的として提供しています。本講義は一般公開されており、高校生をはじめ、どなたでも無料で受講が可能です。

表1 2018年度開講講義

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考
4月28日～ 2019年3月28日	オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー －臨床試験・メタアナリシス・疫学研究－	田中 司朗 医学研究科特定教授	4週 Self-paced	2回目
5月10日～ 8月2日	国際政治経済学	坂出 健 経済研究科准教授	7週 Self-paced	2回目
6月6日～13日	電気電子回路入門	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課 (B2)
7月4日～ 2019年1月10日	ベクトルから行列へ －線形性とは何か－	三輪 哲二 国際高等教育院特定教授ほか	Self-paced	OCW 再利用
7月10日～18日	電気電子回路入門 (7/11-17)	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課 (B2)・ 追加分
10月8日～ 11月5日	初修物理学B	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課 (B1)
10月24日～31日	システム安全学	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課 (M)
2019年1月24日～ 8月1日	音波入門 －音波の不思議を探る－	北野 正雄 教育担当理事・副学長	Self-paced	

* 配信期間欄の“Self-paced”は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

(3) SPOCのアセスメント

高等教育研究開発推進センターの教育アセスメント室では、MOOCと同様、SPOCについても様々なデータを収集し、講義の改善に役立つ調査研究を行っています。

① 受講者アンケートの実施とコースレポートの作成

SPOCにおいてもコースレポートの作成、コース前後でのアンケート調査を行っています。基本的な構造は、MOOCのコースレポートと同じですが、SPOCは学内の授業と連動して使われることがあります。そのため、授業を担当する教員の要望や目的に応じて、アンケートの評価項目を柔軟に追加・修正しています。例えば、今年度SPOCとして開講したコースの1つは、対面授業と連動しており、学生が各自でオンライン動画を見て学んだことを

活かして授業が行われました。

この授業で作成した受講者アンケートでは、その科目に対しての「知識・理解度」を評価項目として設定しました。事前・事後の変化(図2)を見る限り、オンライン講義を受講することによって当該科目で求められる用語に関する理解が深まっていることがわかります。また、対面授業とオンライン講義の理解度に関する設問も設けており、「対面授業もオンライン講義も同程度に理解できる」と答えた割合は約56%と最も多く、次いで、「対面授業の方がよりよく理解できる」が約31%、「オンライン講義の方がよりよく理解できる」が約12%でした。さらに、自由記述では「何度も見直せるから良い」、「自分のスピードに合わせられる」、「他の講義でも増やして欲しい」といった肯定的なコメントが得られました。

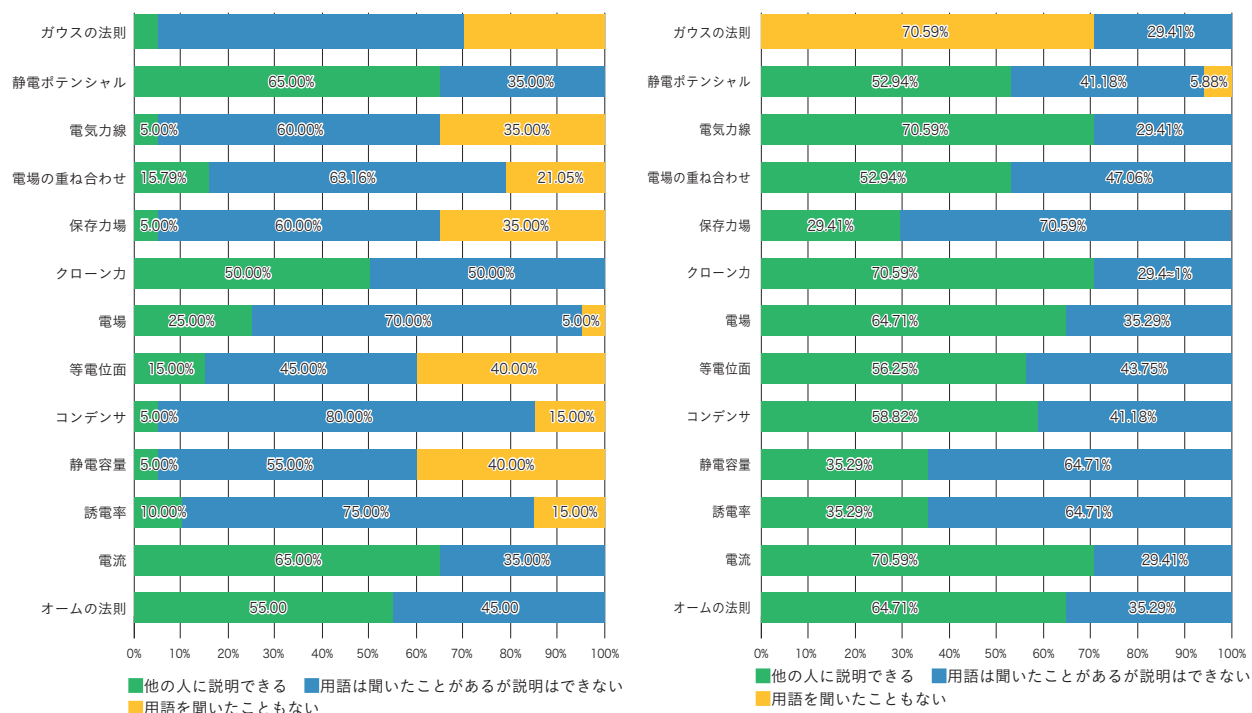


図2 SPOCの効果検証例「知識の比較」(左：受講前 N=20、右：受講後 N=17)

受講履歴に関するデータや独自に作成したアンケートの結果等をコースレポートの形で取りまとめ、それをもとに担当教員にフィードバックすることで、今回のコースを振り返り、授業改善への方向性を議論することができます。

②教員アンケートの実施

SPOCを学内で普及させていく上では、教員の協力が欠かせません。そこで、2018年度にSPOCを制作した3名の教員に対してアンケート調査を実施しました。アンケートでは以下のような項目を用いました。

- 制作に至ったきっかけ
- 認識の変化：制作における負担、内容理解度に対する不安など
- 自身の教授スキルへの影響

この調査から、SPOCの制作が、教員にとって「自分の授業内容を改めて整理することができる」、「自分の教え方に関して振り返ることができる」という機会になっている、すなわち教員にとってのFDの場となっていることがわかってきました。また、制作は最初に思っていたほど負担ではなかったというような声も聞かれました。これらと関連して、「撮影は最初は慣れなかったが、スタッ

フの先生方に助けられた」、「オンライン講義の制作において、岡本先生、酒井先生をはじめとしてスタッフの方々大変手厚くサポートしていただいた。サポートがあったため比較的スムーズに制作できた」といったコメントからも、スタッフによる支援(協働型・伴走型FD)の重要性が示されました。

さらに、「今後オンライン授業をどのように活用できると思うか」といった質問に対して、以下のような回答が得られました。このように、SPOCは多岐に渡って活用可能な仕組みであることが伺えました。

- 15回の授業のうちの一部を代替する形で
- 予習用教材として
- 授業内での説明において
- 復習用教材として
- 講演や研修用の教材として利用
- 中・高校生や留学生、社会人などに京大の魅力を伝えるため
- 学問分野を社会へと普及させるために

学生・教員それぞれから集めたデータを多角的に分析し、開示していくことで、今後のSPOCの普及・拡充へと広めていくことを計画しています。

VII. ICTの教育的利用

(4) 高校生を対象としたオンライン講義の開発

本学では、KoALAを活用して、高校生を対象としたオンライン講義の開発・公開も行っています。

2018年度は、まず、「高校生向けの知的卓越人材育成プログラム(ELCAS)」開講式での岩崎奈緒子総合博物館教授および高部圭司農学研究科教授の講義を収録し、講義内容に即した形で編集、課題を設置することで、オンライン講義を制作しました。

岩崎教授の講義「江戸時代の人びとは世界をどのように見ていたのだろうか」は、江戸時代の人びとの世界観や、自国に対する認識が変化する過程を、同時代の地図や出版物をもとに検討したものです。ロシア帝国の「出現」が、それまで存在していた中華的な世界観をどのように変化させたのかが問われます。

高部教授の講義「樹木の生命力」は、長命かつ巨大という樹木がもつ特徴の背景に、どのような仕組みが隠されているのかを解説するものです。電子顕微鏡が映し出すナノミクロンの世界で生じる化学反応が、樹木という生命体に対してもつ意味合いについて、最先端の研究知見を踏まえつつ説明がなされます。

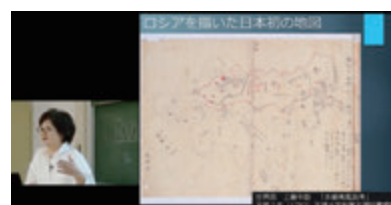
上記のオンライン講義に加えて、「文系」の内容を扱った新規コースの開発が進められ、計6つのオンライン講義が開講しました。

そのうち、若林靖永経営管理大学院教授の講義「考える方法を学ぶ：クリティカルシンキング入門I ブランチ」、「同2 CLR」、「同3 クラウド」、「同4 アンビシャス・ターゲット・ツリー」は、クリティカルシンキング(批判的思考)に用いる思考ツールの学習を通して、行動や事象間の因果関係や対立関係を理解したり、戦略的な行動計画をつくれるようになることをめざす講義です。高校生の段階からクリティカルシンキングの作法に触れ、慣れることで、ロジカルな思考に基づいた、前向きで生産的な議論や行動計画の策定ができるようになってもらうことを目指します。

また、坂本龍太東南アジア地域研究研究所准教授の講義「フィールド医学への誘いI：日本からブータンへ」、「同2：人間の健康としあわせ」は、救急救命医であった坂本准教授が、なぜ「フィールド医学」を志し、どのような過程を経て、現在ブータンをフィールドに活動しているかを紹介するものです。その活動の成果や、そこで得られた知見に触れることで、文化相対主義的な視点や「しあわせ」であることの多義性を学んでもらえるようデザインされています。



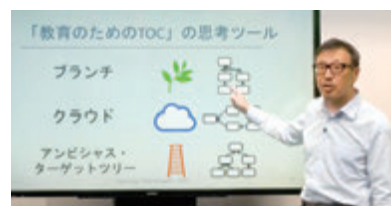
ELCAS開講式での撮影の様子



岩崎教授のコース



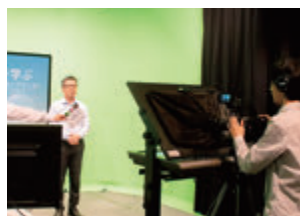
高部教授のコース



若林教授のコース



坂本准教授のコース



コース作成の前に、本コースで学んでもらいたい内容と、その内容を効果的に伝えるための教材について、高等教育研究開発推進センターのスタッフと打ち合わせを行います。写真は左から、打ち合わせの様子、スタジオでの撮影の様子、完成したコースのスクリーンショット

現在、これらの高校生向けオンライン・コースを用いて、「反転」形式でのワークショップが、計画されています。そのうちの一つである、北野正雄教育担当理事・副学長によるオンライン講義「音波入門—音波の不思議を探る—」の受講者ならびに若林教授によるオンライン講義「考える方法を学ぶ：クリティカルシンキング入門I・2」の受講者を対象とするワークショップは、2019年4月に実施される予定です。

4. ICT活用教育のためのポータルサイト (CONNECT)

本サイトは、教育コンテンツ活用推進委員会のもと、高等教育研究開発推進センターが2016年度に構築したもので、2017年5月に正式にオープンしました。本学の教職員に向けてICTを利用した教育コンテンツを制作・活用するための情報を提供しています。

(1) CONNECTの特徴と概要

本学ではこれまでMOOCやSPOC、OCW*、PandA**といったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを整備・運用してきました。ただ、これら多様なICTコンテンツ・プラットフォームの存在の一方で、それらを制作・活用する上で必要となる情報をまとめたウェブサイトは、本サイトが公開されるまで存在しませんでした。

CONNECTはこれらの情報を一つのウェブサイトにもとめ、目的別に適切なサイトへと誘導するポータルサイトです。また、外国人教職員がアクセスしやすいように、日英両言語に対応しています。



図1 CONNECT トップ画面

* MOOC(p.17-20)、SPOC(p.21-24)、OCW(p.16)については、それぞれの該当ページをご覧ください。

** PandAは京都大学情報環境機構が全学に提供している学習支援システム(LMS: Learning Management System)です。

(2) 2018年度の公開・更新状況と新着記事抜粋

2018年度は、インタビュー記事や、ICT活用教育に関する国内外の動向を紹介した記事をはじめ、各種記事・ページを計15回にわたって新たに公開・更新しました。その一例として、上杉志成化学研究所・iCeMS教授のインタビュー記事(図2)や、複数のMOOCコースからなる一つのプログラムであり、現在、国外の大学・大学院の正規の課程内にも組み込まれつつある「MicroMasters」の紹介記事(図3)などがあります。



図2 上杉志成化学研究所・iCeMS教授インタビュー記事



図3 「MicroMasters」紹介記事

VII. ICTの教育的利用

(3) コンテンツについて

「Topics」というページでは、インタビュー記事や、ICT活用教育に関連したイベントの開催報告記事が公開されています。インタビュー記事では主に、京都大学のなかで、ICTを用いて特徴のある授業を行っている教員に話を聞いています。どんなICTを、なぜ授業に導入したのかや、その効果といった点の

みならず、授業にかける思いや、苦労を通じて感じた手応えといった、経験者だからこそ語ることのできる話が盛り沢山です。次頁では図3中で赤枠で囲みました、馬場教授のインタビューの抜粋を掲載しております。

教員インタビュー

- 専門家育成だけでなく、市民リテラシー向上に向けて
医学研究科 田中司朗先生
- 「京都メソッド」から始まった「反転授業」とその海外展開
化学研究所/iCeMS 上杉志成先生
- 図書館での演習を通じて、学生が「一歩前」に踏み出せるように
附属図書館 北村由美先生
- 一人ひとりの学習スタイルの尊重を目指す反転授業
薬学研究科 金子周司先生
- 電子教科書を用いて目指す「より人間らしい」教育**
理学研究科 馬場正昭先生
- 講義をもっとオープンに
医学研究科 山田亮先生
- 多様な文化の中で漫画を通して学ぶ生命倫理
文学研究科 見玉聡先生
- おもてなしの議論を通して異文化を理解する
経営管理大学院 山内裕先生
- 「ニコ動的講義」が生み出す教員と学生のシンクロ
情報学研究科 水原啓暁先生
- MOOCを通してつかんだ教え方のヒント
工学研究科 跡見晴幸先生
- 気軽に参加できる数学講義
理学研究科 伊藤哲史先生
- TwitterとPandaによって変容するコミュニケーションの質・関係性
人間・環境学研究科 吉田純先生

イベント 開催報告

- 総長 MOOC イベント
“President's MOOC ‘Evolution of the Human Sociality’ Live!”
- 国際シンポジウム
“MOOCは大学教育をどのように進化させるのか”
- 国際シンポジウム
“MOOC時代の大学教育改善”
- 国際シンポジウム
“学習のための、学習としての評価—PBLとMOOCにおける学習評価の可能性—”
- 学内ワークショップ
“教育の最先端：MOOCって何？—その利用法と実践ノウハウまで—”
- 学内ワークショップ
“部局・教員・学生のニーズに合わせた教育・学習支援のためのICT活用について考える”
- 「医学部医学科向け、Panda利用説明会」

Trends：最新のICT活用教育動向

- 第1回「MOOCをめぐる最新動向」 (2017年6月30日配信)
- 第2回「高等教育にもVR・AR」 (2017年7月11日配信)
- 第3回「人工知能(AI)と高等教育の未来？」 (2017年7月21日配信)
- 第4回「MITにおけるICT活用教育推進のための学内イベント “MIT Teaching with Digital Technology Awards”」 (2017年9月20日配信)
- 第5回「ライス大学による電子教科書プロジェクト “OpenStax”」 (2017年10月4日配信)
- 第6回「アリゾナ州立大学によるMOOCを用いた初年次教育 “Global Freshman Academy”」 (2017年12月7日配信)
- 第7回「アクティブラーニング向けの教室の整備がトップ項目に」 (2018年2月20日配信)
- 第8回「企業や大学が提供する新たなMOOCプログラム “Professional Certificate Programs”」 (2018年11月13日配信)
- 特集「シリーズ ~MicroMasters~ Vol. 1~3」 (2018年6月11日、6月25日、7月12日配信)

図3 コンテンツの抜粋

ICTを使って特徴のある授業実践をされている先生の情報をお待ちしております。本ページに設置してある「お問い合わせフォーム」等からご連絡ください。

(4) インタビュー抜粋



馬場 正昭 理学研究科教授

電子教科書を用いて目指す「より人間らしい」教育

【プロフィール】 本学の理学研究科博士後期課程を修了したのち、神戸大学理学部助手、本学教養部・総合人間学部助教授を経て、2004年4月より現職。専門は電子スピニング化学。長らく全学共通科目の授業改善に携わってきたほか、2014年からはスポーツ実習(サッカー)も担当。学術図書出版社や化学同人から複数の教科書を出版している。趣味はテニス、音楽鑑賞他。

まず、電子教科書を用いた実践について伺えますでしょうか。

2017年度から、「文系向けの基礎化学」という授業で使い始めました。もともと使っていた教科書『教養としての基礎化学』を大学生協さんの協力のもと電子化し、同じく生協さんが開発したプラットフォーム上で公開しています。電子教科書の主な機能としては、マーカーや付箋、コメントの共有やアンケート機能などがあります。

「文系向けの基礎化学」とはどのような授業なのでしょう。

2007年に「化学概論」という授業を改組して始めた、全学共通科目です。化学の基礎知識を教えるだけでなく、環境問題や原子力発電の是非といった「答えのない課題」をテーマに、ディスカッションやプレゼンテーションを実施しています。理系の人間だけでは解決できない問題だからこそ、行政や法律、経済等を学ぶ文系学生にしっかりと考えてもらいたいと思い、授業設計を行っています。受講者の数は、毎年300名近くにのびります。



(左)「文系向けの基礎化学」の様子。講義室がいっぱいとなっていることが分かる。
(右)電子教科書をモニターに映し出す馬場先生。授業中も手元のiPadを用いている。

これまであった授業で、電子教科書を取り入れられたのですね。

はい。電子教科書自体に対しては、以前から関心を持っていました。折しも私が京大生協の理事を務めていたときに、全国の大学生協から電子教科書の運用に参加して欲しいとお願いされ、開発段階から参加することになりました。

導入に際して、まず私が期待したのが、電子教科書を通して、学生とコミュニケーションを取ることでした。これまで私自身はより人間らしい教育を実現することを目指してきたのですが、そのような人間らしい教育を行う上で、コミュニケーションは重要な役割を果たすからです。

「より人間らしい」教育ですか。詳しく教えてください。

一つには、一度大学に来られなくなった学生をどうフォローしてあげるかです。私の所属の理学部でも、そのような学生に対してはメールで連絡し、面談を受けるように促しているのですが、多くの場合返信はありません。他の手段もうまいかないことが多いです。本学の学生の場合、入学前のよくできていた自分のイメージがあり、プライドも高いため人に頼ることが苦手ということもあるでしょう。

一度大学に来られなくなるとフォローは難しいですね。

そうなのです。そこでどうするかと考えて、電子教科書を導入しました。電子教科書でしたら学生が普段使うスマホやPCを介して、今日はこの範囲を扱い、このような話をしたとか、どんな課題を出したといったことを、メッセージとともに伝えられます。大学に行かなければと思いつつ家にこもってしまっている学生にとって、普段使っている機器で大学との接点ももてることの意味合いはとても大きいです。ひいては彼らが再度、大学での勉強を頑張るきっかけとなればと思っています。

他にも考えていらっしゃることはあるのですか。

もう一つには、学生のライフパス全体に目を配った教育をしたいという気持ちです。本学の場合、小中高としっかりと育ててもらった良い学生を預かっている以上、ゆくゆくは社会のリーダーになる学生を育てる責任があると考えています。そのため、特に学部生には、専門知を学ぶだけでなく、社会全体への関心や基礎的な考え方を身につけてもらう必要があります。

ディスカッションやプレゼンテーション、レポートという形で学んだことを「外化」させることは、その一助になると考え、実際に実施しているのですが、授業の性格上、文系と理系の考え方や知識、両方が必要となります。電子教科書やICT機器は、情報を検索でき、考えていることをすぐに共有できるという点で、効果的といえます。

もうすぐ退職の年だと聞きました。本学の教育に関して残しておきたい言葉はありますか。

今日お話しした電子教科書については、退職までに完成させた上で、若手教員に受け継ぎたいと考えています。若い世代の場合、導入の際に障壁となりがちな「デジタル・アレルギー」も少ないので、うまく利用してもらえればいいと思います。

この点について付け加えると、やはり若手教員にこそ教育を頑張ってもらいたいですね。今の若手は、研究や学務が忙しくてなかなか教育にまで手が回らないと聞いています。ただ、学生のためと思って行ったことが、結果的に自分の成長に繋がったことが、経験上、多々ありました。基礎教育を通して研究者としても成長できることを実感してもらいたいですね。

忙しいからと言ってないで、たまには学生とICT教育を楽しむのも悪くないですよ、と勧めたいです。

(CONNECT掲載中の記事より、抜粋・改変)

馬場先生のインタビュー記事のオリジナル版は以下よりアクセスできます。

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/baba01.php>

VII. ICTの教育的利用

5. ワークショップ「ICT活用について考える」

本学では、2018年3月8日、教育コンテンツ活用推進委員会主催の教職員向けワークショップ「ICT活用について考える」(正式名称:「部局・教員・学生のニーズに合わせた教育・学習支援のためのICT活用について考える」)を開催しました。学内13部局から23名の教職員が参加し、OCWやMOOC、KoALA、

PandAといった本学が運用・管理する教育向けICTツール・プラットフォームを、実際の教育・学習支援にどのように活かすことができるか、また導入の際にどのような課題があると思われるかについて議論しました。



プログラム [司会進行: 田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授]

11:45~11:50	話題提供1	「本学におけるSPOC・MOOC・OCW・LMS活用の概要」 飯吉 透 高等教育研究開発推進センター センター長・教授
11:50~12:05	話題提供2	「学内における教育コンテンツの活用事例についてーSPOCを中心にー」 酒井 博之 高等教育研究開発推進センター 准教授
12:05~12:45	グループワーク	「部局・教員・学生のニーズに合わせた教育・学習支援のためのICT活用について考える」

本ワークショップでは、まず、高等教育研究開発推進センターの飯吉透センター長・教授より、SPOC・MOOC・OCW・LMSの活用方法について話題提供がありました。本学でどのようなICT活用教育のための基盤が整備されているかが紹介されたうえで、それらICTを既存の講義の中で補完的に使うだけでなく、高大接続、リカレント教育との接合、留学生に対する教育的な手当て、事前学習といったことが考えられる旨が紹介されました。さらに、今日の世界的潮流として、授業単位や講義単位の中でのBlendedな学習だけでなく、単位や学位といった制度の中でのBlendedな運用の可能性があるという展望が示されました。

次に、同センターの酒井博之准教授から、学内における教育コンテンツの活用事例について説明がありました。これまでに「KyotoUx」からMOOCを配信した教員が、どのような形でMOOCを活用されているかの事例が紹介された後、KoALAをはじめとするSPOCとMOOC、OCW、情報環境機構が管理するLMSのPandA、それぞれの特徴と相違点について整理がありました。

グループワークで参加者は、「各部局の教育的課題のうち、ICTを使って解決できそうなものはあるか」「解決できるかもしれないとして、課題はどこにありそうか」の2点について議論しました。

後半、各グループの議論の共有と全体討論を経て、1時間に及ぶワークショップは終わりました。



グループワークで出た意見の抜粋

【MOOCについて】

- 動画を撮影し、字幕を付けてという様子をみると、MOOCはハードルが高く感じられる。また、作ってからも、MOOCを使うとどういうメリットがあるかが分からないとなかなか普及しないのでは。
- (上の意見に対する応答として)MOOCの活用方法としては、実際に全ての講義で反転授業用の教材として利用している例がある。
- 普及という観点からいうと、留学生は大学院受験用や予習用にMOOCを受講している事例も多い。そのため、日本人学生への普及が課題であろう。一度調査してみたらどうか。

【KoALA(SPOC)について】

- KoALAの場合、MOOCに比して制作面でのハードルが低く感じられる。ただ、仮に動画を撮影する場合、居室だと音で中断されることもあり、貸しスタジオや機材のレンタル等があると便利だ。また、ディスカッションが盛り上がらない場合があり、それが課題だ。
- (上の意見に対する応答として)貸しスタジオは、学内のある建物内に自由に使えるところがあったはずだ。編集方法やセットアップの方法に関して、ノウハウ集があると便利だろう。また、ディスカッションを機能させるには、成績と絡めるというのが有効だ。また、そこでお互いに議論することの価値を身につけてもらうためにも、教員が方向づける必要がある。
- KoALAの手軽さを考えると、学生の教育の一環として、学生主体で制作されたKoALAのコースというのも面白いのでは。
- ほぼ全ての授業を英語で実施している研究科からすると、日本人学生のサポートという点で、予復習教材をKoALAで作り、それを利用してもらうというのは有効かもしれない。
- MOOCにもいえることだが、推薦入試等でも使うことができたら面白いだろう。

【OCWについて】

- 高校生に京大OCWを見せると、熱心に見てくれる。高校生の方がニーズがあるのかもしれない。
- (ある参加者の場合、)学部／研究科の事情により、授業でICTを用いることは少ないが、今後もオープンキャンパスのOCW化等は続けていきたい。

【PandAについて】

- 報告書のような重いデータをアップロードでき、また提出状況も確認できるということで、現在PandAを積極的に使っている。案内や要望をすぐに共有できるのもメリットの一つだ。
- 受講生が多い場合、リプライとフィードバックの手間が膨大になり、大変だと感じることもある。
- (上の意見に対する応答として)現在、リプライやフィードバックを楽にする新しい技術をテスト中のため、少し待ってもらいたい。

【その他】

- 教育コンテンツを一から作ることは大変なため、学外のコンテンツを利用するのも一つの手だと考えるが、何か良い方法はないか。
- 著作権の問題からKoALAに外部コンテンツを取り込むことはできないが、例えばPandAにリンクを貼って、該当するコンテンツに飛ばすという方法が考えられる。

FD研究検討委員会概要

FD研究検討委員会は、本学の教育担当理事、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員に事務部代表を含む30名程度の委員から成ります。この委員会と高等教育研究開発推進センターが協力して、必要に応じて検討課題に対応したプロジェクトチームを立ち上げ、FD活動推進への取り組みを行っています。

京都大学のFDに関する取り組みについては、FD研究検討委員会のウェブサイトをご覧ください。

サイトURL: <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>



Kyoto University
Faculty Development

2018 Mutual Faculty Development